THE QUIET AMERICAN と *A BURNT-OUT CASE* の文体的考察

佐藤　孝

A STYLISTIC STUDY OF GRAHAM GREENE'S TWO NOVELS

Takashi SATO

(1994年8月22日受理)

What the writer ventures to do in the present paper is to analyze the structures and the language itself of the two novels, *The Quiet American* and *A Burnt-Out Case*, with special reference to their salient stylistic aspects and features. The scope is limited to the two novels, but the writer's analysis of the style is an attempt to find the artistic principle undelying a writer's choice of language to make 'an implied reader' aware of the artistic effect of the whole.

The complex and cofusing time scheme of the former novel is effective in conveying the sense of engagement, which seems to come to dominate Greene's later novels.

In the latter novel, the narrative goes on chronological order with a dialectic tension of drift and inherent antipathy, with a structual crux between the idea of errancy and that of quest.

As to the theme and subject matter of the two novels, the writer notices a return to the visionary intensity of the author's earlier novels.

1

Graham Greene が描く Andrews, Pinkie, whisky-priest, Scobie の系列は近代英文学における英雄・反英雄の枠組みの中に組み入れられよう。信仰・不信仰の問題に焦点を当て現代社会での人間の精神的支柱を追求する Greene の意図は明確である。*The Sense of Reality* で Morin が抱く神に対する Belief と Faith の両相は Greene の作品に一貫して流れる宗教観を簡潔に提示する観念であり，上記の登場人物はそれぞれ与えられた限界状況の中でこの二相の断絶に苦悩し挫折する過程において神の存在の根源に戦く人々である。現代社会の宗教的価値観を追求することにより Greene は彼等の悲劇的存在を主張し，神に対する彼等の信仰あるいは不信仰を人間の愛という一般的な価値観として確立する。

Greene がこの状況を描く技法は特に初期の作品では目まぐるしく生起する逃走，追跡，自己分裂，倦怠，猜疑心，裏切りに合致するように表層の単語の反復ばかりでなく，深層の形式や機能の反復を多用することによりそれぞれの場面での緊張感を高める技法と言える。

作品に展開される叙述の世界は作者の意図する小宇宙であり，この世界の実体を読者が直接体験できるかどうか，如何に読者の心の中にこの小宇宙を現実化できるかどうかは表出技法に負うところが大きい。特に言語体系及び視点の設定はその技法の中心をなすが，その場合読者の読み方の構成を考慮することも必要である。作者が解説者の形で参入することを避けようとすることが近代小説への変貌の一段階として考えられ，叙述される世界の斬新さ，真実性とそれを支える作者の思考そのものよりもこの手法の実験的な運用と展開が重要視され，時には創造の世界の実体が失われる場合もあったが，いずれにせよ常に文体上の実験が小説の変貌を始動させるものであったと言える。視点については Greene はある特定の語り手を読者の意識に植え込み，作者の姿

を完全に消す二重構造または複数の視点を設定しようとする明確な意図は持たなかったように思われる。Greene の小説に統一性を与えるものは作品の構成を緊密，明晰にする叙述の形態である。R. Scharrock の次の見解はこの点を適確に指摘したものである。

Since melodramatic action had been chosen as the mode for the reflection of moral conflict, romantic language had been eliminated, adjectives and adverbs had to go, in order to capture the hardly expressive core of a few seconds of fateful near-automatic response. To say that the style was tautened by the discipline of writing would be a correct, but too negative way of putting it.[1)]

Greene にとって1950年代は一度失った危機感を取り戻す為に動乱の地を歴訪する「大きな不安」の時期であり，その旅から *The Quiet American*, *Our Man in Havana*, *A Burnt-Out Case*, *The Comedian* の四作が生まれる。

この中で *The Quiet American* は主題も構成もそれまでの作品と全く違った方向を示す注目すべき作品である。現実の政治，戦争に舞台をとり，その中で人間は関係を持つ (take sides) 態度を明確にすることによってのみ生き続けることが出来るという現実参加 (engagé) と一国の政策批判が中心に据えられ，複雑な時間構成の中で物語が展開する。

しかしこの作品で示された方向と力点は *A Burnt-Out Case* において1950年以前の作品に提示されている神の元における人間の救いと滅びの問題に再帰し表現も

'Language is spare, supple, free of clogging adjectives, and similes seem to float naturally to the surface of Greene's prose than being snatched from some storehouse of strained comparisons.'[2)]

と評される通り初期の技法が回帰する。

この小論ではこの二作を中心に Greene のこの時期における作品構成の分析を通し主題とその表現手法・テキスト表層構造との関連を考察する。

2

The End of Affair は小説家を中心人物に据えその小説家が叙述する形式で物語が展開するが，時には視点を移動したり小説家が知ることの出来ない部分は他の人物の日記を挿入するなど表現形式が多様にわたる技巧的な作品である。その中で試みられた一人称の手法は *The Quiet American* においても採用されるが，この作品では更に叙述の時間構成に新しい工夫が見受けられる。つまり(1)'an implied reader'の時間，(2)叙述の時間，(3)虚構の世界の時間と三つの時間相の中で物語が進展し，叙述の加速，停滞が図られる。(表1)

'an implied reader' の時間は Pyle の死の夜から始まりその四ケ月後に Fowler が妻が難婚に同意したことを Phuong に伝え Pyle の死後は全てが自分の望む通りになったことに気付きながら 'someone to whom I could say that I was sorry'[3)] の存在を願う現在の時間へと緩やかに移行する。

一方叙述の時間は Pyle の死の夜→ Vigot による最初の尋問→'an implied reader' の顔出し→ Pyle との出会い→ Fowler, Pyle, Phuong の生活→ Phat Diem 地域での戦闘，Fowler の負傷→ Pyle の死より二週間後の Vigot の尋問→ Pyle と Phuong が親しくなる経過→ Vigot の訪問→ Pyle の生前に Fowler が the Vieux Mouline での食事に誘い出す場面→ Pyle の死より四ケ月後へと flashback や collage が組み合わされ，その度に物語の速度は時には急速に時には緩慢にと変化する構造である。しかも最後の時間帯は結局は冒頭への時間に連続する構成であり，過去の世界に引き戻されている筈の 'an implied reader' は現在の世界に留まっている錯覚に陥る。この様にこの小説の終結部では一つの新しい秩序を導入する試みがなされ，この新しい秩序は同一主題の漸相的な展開を期待できる秩序であり，同時に Greene の意識の根底に潜む神の許容に対する確信ともなる。

次に虚構の世界の時間帯は Fowler と Pyle の出会いより Fowler, Pyle, Phuong の関係, Phat Diem での Fowler と Pyle の奇妙な友情，負傷後の Fowler が Pyle の第三勢力への加担に疑念を抱く一連の事件, Pyle の暗殺へと続くがこの為に叙述の時間との間に大きな断絶が生じている。'an implied reader' の意識は常に現在に留まろうとするが，叙述の時間は任意の時間帯に移行し，'an implied reader' の時間の軸と一致することは少ない。

これは Thomas Docherty が 'unmotivated and improbable intervention' と呼ぶ現象であり，物語の動き及び時間の進行に大きな役割を果たす手法であって Greene は人物の現在の姿を提示する場合にこの技法を採用する。

第三勢力を樹立することにより共産主義の侵略か

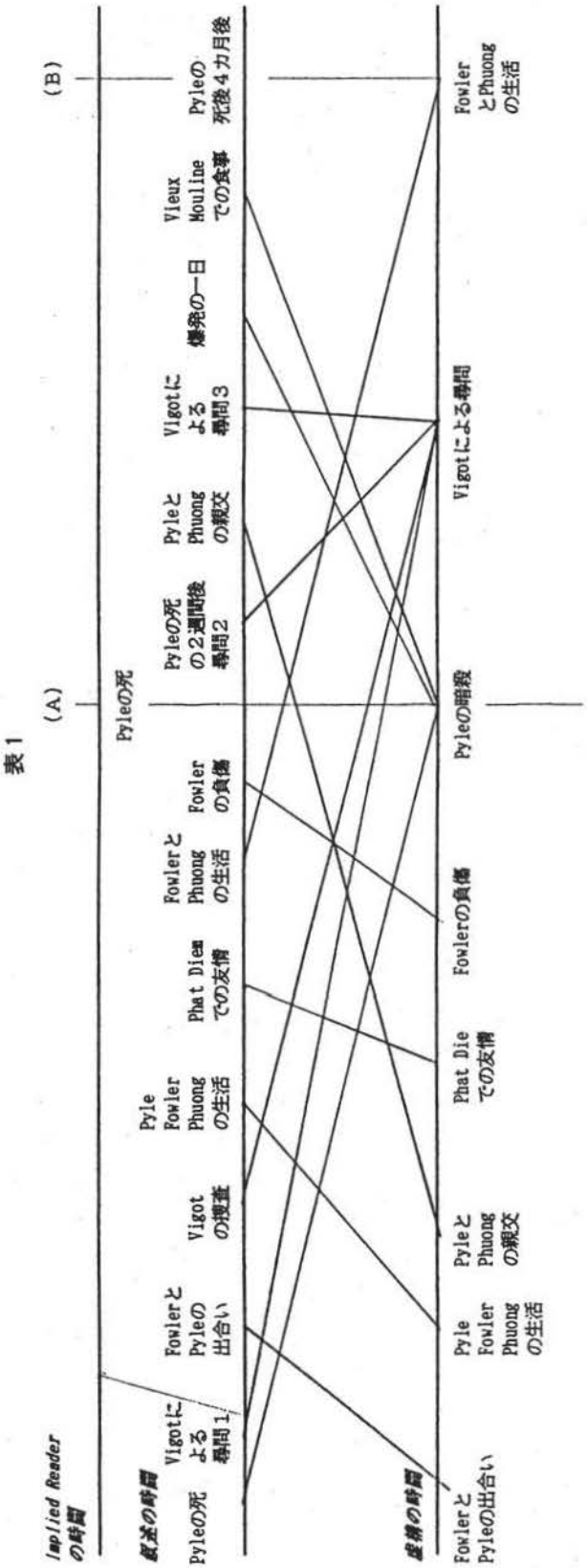

表1

ら東洋を守るという Hading の理想を信奉し，善意から積極的に行動する Pyle は 'take sides' しない筈であった Fowler の優柔不断の行為，裏切りによって暗殺される。一方，Pyle の死後にあっても

The human condition being what it was, let them fight, let them love, let them murder, I would not be involved.[4]

と主張する Fowler は結局は 'One has to take sides. If one is to remain human.'[5] の心境となる。この Pyle の死と Fowler の心の揺れを描写するに Greene は一つ一つの対象を時間順に描写することを避ける。Fowler 自身の時間を各章の冒頭で例えば

'The morning Pyle arrived in the Square by the Continental.'[6]

'I had thought I would be only one week away from Saigon, but it was nearly three weeks before I returned.'[7]

の様に示し時間に対する 'an implied reader' の意識を修正して時間相を明確にしつつ虚構の時間帯を物語全体の進行の枠組みの中で相対的な現在という時間帯に変換する技法を用いている。

この場合，叙述が虚構の時間進行に正確に合わせて進められるとすれば単調さは避けられず，Fowler の裏切りとその償い，自らの変身に対する屈辱感も読者には予想されるものになろう。叙述のそうした緩慢な進行よりも時間相を明確にしつつ叙述を唐突に転調する事により，虚構の世界が 'an implied reader' の意識の流れの中に自然に受け入れられる結果となる。Greene はこの点では Fowler が何故このような行動をとるかを分析することよりも 'an implied reader' には理解し難い作中人物の潜在意識の働きという形で描写することにより Fowler の生の真実を示唆するものである。

'I envied those who could believe in a God and I distrust them. I felt they were keeping their courage up with a fable of the changeless and the permanent.'[8]

という Greene にとって生涯つきまとう意識が根ざしており，更にこの作品では Pyle の 'innocence and goodness' に対する嫌悪が加わっていると言えよう。

Fowler が Pyle の人物，行動を思い出す形でいずれ Pyle は Phuong を失うことになるであろうし，将に自らも同じ立場になる可能性が充分にあることを悟る場面[9] では Fowler の焦燥が 'happier'，'a

dollar love', 'the future' の三つの表層の構成素が無意識に反復される表現となり, 'an implied reader' は 'an implied author' とほぼ同じ生理的, 心理的状況に置かれる。これは Andrew の心に生起する相反する自己の二重性, Carlyon という人物として現れるある想念による追跡を観念的に執拗に描出する *The Man Within* の手法と類似しており, その作品以後の Greene の心の変化が文体の変化にまでは及ばず, ある意味での文体の恒常性を物語るものである。反復の現象が言語の創造性に関与する例で, Greene 愛用の技法である。

このような叙述時間相の転調は当然ながら中心人物の一貫性, 客観性に関連を持つ。作品の時間帯は実際には,

(1) Time of the fictional history
(2) Time which the reader inhabits
(3) Duration of the fictional action
(4) Writing and reading times
(5) Duration of pseudo-history as it is related in the fiction[9]

が存在するわけだが *The Quiet American* の場合はこの五相が上述のような巧みな構成により統一した形で読者に与えられ, 作者がある小説を書くという行為が読者に新しい体系による創造の認知と自己体験を深める喜びを与えることになる。

The Quiet American において示された 'engagé' の精神はその後の作品に一つの方向を与えることになる。*A Burnt-Out Case* では献辞に見られる通り 'removed from world-politics and household-preocupation' という形で生かされる。この作品の筋は単純であり表現形式も時間構成も簡潔であると言える。物語の進行は比較的速く, 'an implied reader' の生活時間の中に事件の時間的広がりが組み入れられる。この作品に置いて Greene は 'an implied reader' の現実の時間と作品の時間的構成を巧みにすり寄せるため時間の縮小, 拡大を用いる一方, I.R. Richards が 'emotive use of language'[10] と定義する言語の特性を充分に活用し Querry の姿をとる正体不明の男, 「燃え尽きた人間」という新しい概念を創造している。

前半は中心人物である Querry の行動, 思考が固定し物語の進行は一時停滞するかのように見え, むしろ Parkinson や Rycher ら Querry を観察する人物が種々な方面からこの不可解な Querry を動かしその動静を探るという形で叙述が進められる。そして Rycher の年若い妻 Marie を病院に送る Querry を描く 6 章からは急速に結末へと向かう。

'I can promise you, Marie, touto a toi, all of you, never again from boredom or vanity to involve another human being in my lack of love.'[11]

と現実のとらわれからの解放を望む Query が 'absurd' の一語を残して射殺される展開は, 'engagé' が裏返しの形でテーマとなっているものである。

Congo のカトリック教ハンセン病療養所に Querry が到着する。この地は目的とした土地ではなく空港での偶然事がもたらした結果である。無神論者であるが人間愛に満ちその地で救癩活動を続ける Dr. Collin は人間の変転に希望を抱き, キリスト教もその変転の一つの波に過ぎないとしその変転に宇宙の愛の兆候を見いだしている。彼は Querry の良き理解者となり burnt-out case の Deo Gratias を紹介するが Querry が森の中で Deo Gratias に無償の救いの手を差しのべることから Querry は自分の行動に初めて意義を見いだすことができ平安が訪れるかのように見える。しかし, 皮肉なことに商人の Rycher や偶然取材に訪れた Parkinson により 'The Hermit of the Congo', 'An Architect of Souls' と見なされる。大きな倦怠と無関心, これは作者自身の信念でもあるがそこから人間としても職業人としても 'Burn-out' の存在となった Querry は結局は自分で築いた社会的名声が拭い去ることの出来ない傷痕となって 'engagé' の状態に閉塞される状況となる。

更に Rycher の妻 Marie の悪意の無い作り話によって窮地に立たされた Querry は「王様」の童話の形で自分の人生を統括することはできたが理不尽な状況の中で生命を失う。第 3 部 2 章にみられる the Superior と Marie の間のユーモアあるやりとりが物語の展開に思いがけぬ方向を与えるように見えながらも the Superior は結局は 'The God can not feel disappointment or pain.' という形で Querry の事件を評価する寛大な心の持ち主であるが故に Collin-Querry の無信仰とは一線を画すことになり 'burn-out' という Querry の心を救うことはできない。作者はこの地で救癩活動に従事する the Superior をはじめとする修道院の人々が「何故この地での活動か」という状況設定について明言はしていないが, Querry に注がれる読者の目はこの全体の人々の上に注がれる。その結果, 'burnt-out' の形容はこの人々にも与えられることになり Dr. Collin は

もとよりRycher, Marie, Father Thomasらは全てそれぞれに病根の残った人間像であることが明確になる。

この作品の時間的推移は否定的な性格を持つQuerryの倦怠と無関心を象徴するように緩やかであり，Congoの奥地に固定されていると言えよう。特に初期の作品にも多く用いられた比喩的な表現や象徴的な事物が挿入され，読者の注意を人間意識の深層に向けることになり時間の推移は暫し副次的な関心事となる。

例えばQurryが初めてRycherに出会い工場に招かれMarieの手による夕食をとる場面では，'a black and white moth', 'the gecho on the wall', 'the pointed lizard'にMarie, Querryの視線が固定するばかりでなく，'like a piece of licher on the wall', 'like a belfry outside the door', 'like a child after the dessert'と幾つもの直喩が挿入され前後の脈絡にそぐわないQuerryの動きを巧みに表現する。Querryの意識に映ずる心象を描出し，読者に特殊な時間感覚を与える効果となる。そこではA Quiet Americanにみられる時間構成の手法はなく過去の事件は人物の思考の枠の中で時折何か偶然の作用によって取り戻されるのみで，時間的進行には全く影響を与えてはいない。

例えばPart VIでQuerryがMarieをLucの病院に連れ出す部分では読者の心は本来ならば来るべきクライマックスに向けられるはずであるがKingと宝石のmaster-technicianの童話やParkinsonの登場により時間的連携が薄れ，こうした断片的な要素が提示される状況では読者の心理的持続が損なわれることはない。

3

使用する言語の潜在的な力を作者がどのように活用するか，逆に言語による表現の限界をどこに見極めるかはその作品の質を決定する要因である。

ここでは言語の内在的な機能に焦点を置き，上記の2作品を分析する。作家がどの語をどのような機能で使用しているか，そして最終的にどのようなイメージを喚起することになるか，またある一文が目的とする描出の効果，更に各段落間の連結等を綿密に分析することにより作家の志向する思想の独自性が明確になり，作家の個性的な文体が考察できる。

Greeneについては画一的な人物設定，意図的なプロットにより善と悪との対立という哲学的主題を中心に据え，スリーラー的手法を駆使し虚偽の世界を創造するとの批判があり，更に主題と手法の一致という点からも疑義が提示される場合もある。しかしその何れの場合も現代人の魂の救済，宗教性等のテーマを論ずる方向が濃厚であり，作品の文体的特質に関する論は極めて少ない点は遺憾である。

更にその数少ない文体の論考においてはテキストがどう具体的に存在するかを論ずるよりも規範論に陥りがちである。作者の観念構造は無意識の中に表出されることが多く作者を作者たらしめる心情もまた極めて自由に変化する為に論者は焦燥の中に既定の方向に走る危険がある。この危険を避ける方法の一つはmessageの機能を探ることではなくそのmessageが意味を伝えるsignifierとなる発端及び過程を考察することであろう。

文体指標の研究においてその方法を確立したA. Q. Mortonによるとテキストの1,000語から1,100語を調査すると頻度がほぼ均一となりその10倍の量においても頻度が変わらないことが明らかである[12]。抽出においてその立場をとり二作品の特徴的な箇所を分析する。

人物の描写に当たって作者は全知全能を装う必要はなく，むしろ人物の意識を自己の意識から解放することが多いが，その場合は語りの言述，語と統語構造の検討が重要となる。二作品において人物の思考と行動の二つの観点を総合し，'an implied reader'の推測を'an implied author'の確信へと推移させる箇所は*The Quiet American*においては第2章(2) Pyleの紹介であり，*A Burnt-out Case*では第1章(1)のQuerryとthe captainの一日の生活の描写であろう。多様な要素の総合体である登場人物を緩やかに展開する物語のなかで無作為に見える細部の即物的な描写で紹介し，決して要約的な人物描写に至らない点，また提示に当たる部分が細分化した形で語られる点も共通していると言える。

G.N. Leech及びM.H. Shortが文体のchecklistとして提唱する(A) Lexical categories, (B) Grammatical categories, (C) Figures of speech, (D) Context cohesionの細目69項目[13]について検証するところでは次の通りである。

(1)　*The Quiet American*においてはstatic elementを示す動詞とdynamic movementを示す動詞の使用度は49：21であるが，前者が使用されている場合であっても動きを示唆する表現が多く，Pyleの無知とFowlerの優柔不断を暗示する表現である。

（2－1） 一方 *A Burnt-Out Case* においては abstract noun に対する concrete noun の比は1：1.7と高く Querry の周辺の事物を即物的に列挙し荒廃とした状況を設定する描写に効果的である。

（2－2） 形容詞に対する副詞の割合は2：1であり不気味な状況の提示に有効な選択と言え，また前置詞句の比率が高いことも即物的に提示される事物を人物の知覚に緊密に結びつけるのに効果的である。

（2－3） 30語以上の長文14は何れも状況を人物に投影する叙述である。

（2－4） 関係詞が多用され5～6相に及ぶ従属節となる場合があり，叙述の速度は減少するが背景の荒涼さ，人物の疎外感を与える効果を持つ。

（3） *The Quiet American* に対して *A Burn-Out Case* での 'the' の多用（1：1.3）は 'an implied reader' が 'an implied author' の世界について同じレベルの知識を持つことを前提とした描写であり，更に 'a, an' の使用も多く（1：1.6）特に人間について使用される場合はこの指標の一次性により Querry, the captain が孤独と自立の象徴であることを示している。想像や連想の喚起を許さない技法となり 'an implied reader' の心理的負担は軽減される。

（4） 前置詞の使用はその数においては2作品に大きな差はないが二つの名詞表現を接続する 'of' の多用がみられ知覚と認識の共起を示す技法である。

（5） 文の構造については *A Burnt-Out Case* に対し *The Quiet American* の1文の平均の長さは1：0.75, 14語以下の文は1：1.2, 30語以上の文は1：0.7でありその結果 *The Quiet American* の Flesch Reading Ease Score[15] は高くなっているが，独立節に対して従属節の使用度は1：1.5と高くヨーロッパ的な経験の豊富な Fowler の思考が Pyle の登場により逡巡する事を示す効果的な表現である。

（6） 単語の平均の長さ，単語当たりの音節数は2作共それぞれ4.25文字，1.35と一致しこの点で均整のとれた作品である。

（7） Elegant Variation について考察すると *A Burnt-Out Case* には非常に少なく僅か3例を数えるに過ぎない。一方 *The Quiet American* では10箇所以上に使用されているが何れもある特定の人物の視点から見た平板な言い換えであり，叙述の転換，対立する価値観，二重の意味，アイロニーに至る技法ではない。

（8） 両作品ともに人物を観察する 'an implied author' の孤独，無力感が超然として心眼を通じて描かれそれが全体に及んでいることが明らかとなる。

更に A.Q. Morton が近代英国作家の文体形成要素として指摘する23語についてその頻度，配置，語連結を検討すると表2，表3となる。'a' 及び 'and' の出現数に対し 'and a' の連結は両作品とも皆無である点，また 'but' が文頭に使用されることが *A Burnt-Out Case* に見られない一方 *The Quiet American* では70%が文頭である点に特徴があるものの，後者は作品間の表現法の違いではなく *The Quiet American* の抽出部に会話が入っている為と思われ，他の頻度及び連結において作品間，作品内部でのばらつきは殆ど無い。

また全体の語彙について，重複して現れず他と識別できる単語の出現頻度を調査（表4）してみても両者の基本語彙の使用は均一であり，大きな頻度を持つ語彙が一致するなどその指標の相対的位置は類似しており，いずれも簡明直截な方法で伝達目的の為に使用する語によって「追う者，追われる者」，象徴，映像の反復，鋭く視覚化された表現等の特徴を持つ無愛想なまでに切り込まれた簡潔な文体に終始していることが知られ，語彙選択上に若干の好みはあるものの作品形成，執筆年代に影響を与える要素

表2

	BR (1938)	QA (1955)	BC (1961)
a	32	24	39
all	7	4	1
also	1	1	1
and	22	34	37
any	8	3	4
as	12	2	13
at	1	1	1
been	5	7	3
but	5	7	12
for	9	16	16
in	14	10	7
it	4	2	7
no	3	1	4
not	16	34	29
of	9	8	5
on	1	2	4
so	6	13	7
that	59	83	112
the	5	24	4
this	29	4	16
to	-	4	-
very	14	19	13
was	1045	1013	1046
標本			

表3

	QA (1955)	BC (1961)
and a	-	-
and the	9	6
and then	2	1
as a	-	2
as the	1	-
at a	1	6
at the	-	1
for a	2	2
for the	2	2
in a	2	4
in the	8	4
is a	-	3
is the	-	-
of a	1	-
of the	9	11
on a	-	2
on the	3	1
that a	-	-
that the	0	1
to a	1	1
to the	2	2
標本	1013	1046

BR: Brighton Rock
BC: A Burnt-Out Case
QA: The Quiet American

表4

[THE QUIET AMERICAN]

FREQUENCY	RELATIVE FREQUENCY	NUMBER SUCH	WORDS IN FREQUENCY	VOCAB TOTAL	WORD TOTAL	PERC. OF VOCAB	PERC. OF WORDS	PERC. OF WORDS IN FREQ.
1	0.09872	376	376	376	376	77.53	37.12	37.12
2	0.19743	53	106	429	482	88.45	47.58	10.46
3	0.29615	18	54	447	536	92.16	52.91	5.33
4	0.39487	11	44	458	580	94.43	57.26	4.34
5	0.49358	6	30	464	610	95.67	60.22	2.96
7	0.69102	3	21	467	631	96.29	62.29	2.07
8	0.78973	4	32	471	663	97.11	65.45	3.16
9	0.88845	1	9	472	672	97.32	66.34	0.89
10	0.98717	2	20	474	692	97.73	68.31	1.97
13	1.28332	1	13	475	705	97.94	69.60	1.28
14	1.38203	1	14	476	719	98.14	70.98	1.38
16	1.57947	1	16	477	735	98.35	72.56	1.58
19	1.87562	1	19	478	754	98.56	74.43	1.88
22	2.17177	1	22	479	776	98.76	76.60	2.17
24	2.36920	2	48	481	824	99.18	81.34	4.74
32	3.15893	1	32	482	856	99.38	84.50	3.16
34	3.35637	2	68	484	924	99.79	91.21	6.71
89	8.78578	1	89	485	1013	100.00	100.00	8.79

TYPE/TOKEN RATIO:0.47878
TOTAL WORDS READ = 1013
TOTAL VOCABULARY = 485

[A BURNT-OUT CASE]

FREQUENCY	RELATIVE FREQUENCY	NUMBER SUCH	WORDS IN FREQUENCY	VOCAB TOTAL	WORD TOTAL	PERC. OF VOCAB	PERC. OF WORDS	PERC. OF WORDS IN FREQ.
1	0.09551	334	334	334	334	71.37	31.90	31.90
2	0.19102	66	132	400	466	85.47	44.51	12.61
3	0.28653	24	72	424	538	90.60	51.38	6.88
4	0.38204	14	56	438	594	93.59	56.73	5.35
5	0.47755	8	40	446	634	95.30	60.55	3.82
6	0.57307	3	18	449	652	95.94	62.27	1.72
7	0.66858	5	35	454	687	97.01	65.62	3.34
8	0.76409	1	8	455	695	97.22	66.38	0.76
10	0.95511	1	10	456	705	97.44	67.34	0.96
12	1.14613	1	12	457	717	97.65	68.48	1.15
13	1.24164	3	39	460	756	98.29	72.21	3.72
15	1.43266	1	15	461	771	98.50	73.64	1.43
16	1.52818	2	32	463	803	98.93	76.70	3.06
27	2.57880	1	27	464	830	99.15	79.27	2.58
29	2.76982	1	29	465	859	99.36	82.04	2.77
37	3.53391	1	37	466	896	99.57	85.58	3.53
39	3.72493	1	39	467	935	99.79	89.30	3.72
112	10.69723	1	112	468	1047	100.00	1 00.00	10.70

TYPE/ TOKEN RATIO:0.44699
TOTAL WORDS READ = 1047
TOTAL VOCABULARY = 468

は無いと言える。

4

'an implied reader' により想定される 'an implied author' は現実の作家とは視点，意図において一致しない場合がある。小説には当然ある決まった導入点があり，虚構の現在はその時点より始まる。*The Quiet American* において 'an implied reader' は物語の展開による時間の進行を虚構の中では過去形で表現されることを全て想像上の現在に移し換える。'an implied reader' のこの即時性を駆使することにより Greene は物語の緊迫性，漸進性を維持している。'an impied reader' が虚構の時間という形で受け入れる即時性，現在性は特にこの小説の場合，時間回帰，転換の技法により時制相互の浸透の形で提示されている。

一方 *A Burnt-Out Case* に提示される大いなる倦怠は人間としてまた建築家として更には信仰家として燃えつきた存在である Querry の生活を通して描かれている。このテーマは特にアフリカの舞台，Deo Gratios の行動にみられる多義的なアレゴリー風の言語の選択，視覚的なイメージにより効果的に提示されていると言えよう。ある種の言語的特徴が discouse の中で互いに関連しながら一つの伝達効果を達成する。Greene の描く世界は本質的には偶発的な出来事が連続する世界，幾つかのエピソードが無秩序の状態で生起する世界である。更にエピソードからエピソードへの切り換え，時間的秩序に従う描写は観念的な内容を感覚的な対象に置き換える Greene 独特の手法であり初期の作品にみられた簡潔で視覚的な文体がこの作品に継続している。

最後に *OCP*（*Oxford Concordance Program*）の操作にあたっては，本校の大島静夫先生のご助言に負うところが大きかったことを記し，ここに謝意を表します。

注

1) *Roger Scharrock, Saints, Sinners and Comedians,* (Burns & Oats, 1984) p. 277
2) Grahame Smith, *The Achievement of Graham Greene,* (The Harvest Press, 1986) p. 167
3) Graham Greene, *The Quiet American,* (William Heinemann, 1964) p. 247
4) Ibid., p. 27
5) Ibid., p. 227
6) Ibid., p. 20
7) Ibid., p. 74
8) Ibid., p. 50
9) Thomas Docherty, *Reading (Absent) Character,* (Clarendon Press, 1983) p. 171
10) I.R. Richards, *Principles of Literary Criticism,* (Routledge & Kegan Paul, 1970) p. 211
11) Graham Greene, *A Burn-Out Case,* (William Heinemann, 1961) p. 148
12) Ibid., p. 15
13) 長瀬真理，西村弘之，「文章解析入門」，（オーム社，1986）p. 36
14) Geoffrey N. Leech & Michael H. Short, *Style in Fiction,* (Longman, 1981) pp. 75-80
15) Gayle Dawn Price, *The Easiest Way to Improve Your Writing,* (International, 1990) p. 51
The formula :
206.835—Tatal
Total = 1.015×(average sentence length)
+0.846×(number of syllables per 100 words)